
魔法先生ネギま！畏を継ぎし死神

アーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！畏を継ぎし死神

【Zコード】

Z0699W

【作者名】

アーチ

【あらすじ】

主人公の黒崎一護は魔帆良学園の中等部に通う「く普通の男だ少しウザい父と家族思いの妹達、そして幼なじみの明石祐奈に振り回されながらも毎日を過ごしていた。

だが、ある日を境に魔帆良の裏の世界に足を踏み入れてしまう。一護は守ると誓った人達を守る為に自分の秘められた力を使い、戦いの中に身を投じていく…

馴文ですが暖かい目で見守っていただけたら幸いです！

主人公設定（ネタバレ含む）

黒崎一護

「赤き翼」の一員だつた父、黒崎一心の子供。
先祖代々、妖怪の血を引いており一護も例外では無く四分の一が妖怪の血である。

一護自身はそれを知らない。

また、一護は物凄い魔力を有しているが魔法は殆ど使えない。

容姿

BLEACHの黒崎一護と基本的には同じ
妖怪化した際には髪の色が白と黒に変化する。

家族

黒崎一心（父）
黒崎一護（息子）
黒崎夏梨（娘）
黒崎遊子（娘）

母親は海外に行つた時に乗つた飛行機で事故にあり、死亡した。

主人公設定（ネタバレ含む）（後書き）

感想お待ちしています！

一話（前書き）

香夜様、感想ありがとうございます！
期待を裏切らないように頑張るので、これからも宜しくお願い致します！

「ふあ～よく寝たな・・・」

今日は俺達が通っている魔帆良学園中等部の始業式だ。

「お兄ちゃん～～」飯出来たよ～「おー遊子が呼んでるな・・・

「わかった！今行くぜ！」

リビングまで降り、扉を開けると・・・

「はつはつはつは～～お早う～～護つ～～そして喰らえつ必ひか～～」
「ひつせえ」
「ゲポアアツ！～！」

朝つぱらからうつせえなこの親父・・・

思わず蹴り、顔面に入れちまつたじやねえか。

「一兄、危ないじやん！」つち飛んで来たよ～」

「ああ悪い夏梨、でも避けたから良いじやねえか」

まあ、壁にめり込んだ親父を心配せずに飯を食つてる娘つてのもあ
れだけどな・・・

「お兄ちゃん？早く食べないと祐奈さん来ちゃうよ～？」

そうだつた・・・さつさと食べねえとな。

そう思いながら、朝食をかきこんだ。

「ピ～ンポ～ン」

「は～い？あ、祐奈さん～～ちょっと待つててくださいね？」

祐奈の奴、今日来るの早くないか？

まあ、いいか！

「それじゃあ行つて来るぜ～！」

「行つてらつしゃい、一兄」

「はつはつは～油断大敵だ～～」
「うつせえつ～～」

俺と夏梨のダブルパンチが背後から俺に襲いかからうとした親父の
顔面を捉える。

「さすがは我が息子だ・・・これなら療暮らしも大丈夫そうだ…ガ

ハツ

馬鹿が果てたみたいだが、どうでもいいか…

しかし、そう言えば俺って今日から療で暮らすんだっけ？すっかり忘れてたな

「バカは無視して…改めて行つて来るぜ」

「うん、行つてらっしゃい」やつまつ夏梨の顔もどことなく寂しそうだ。

「土日はいつも帰つて来るから、そんな寂しそうな顔すんなよ、な？」と夏梨の頭に手を置いてやる。

「それもあるけど、一兄が居ないとあの馬鹿をビビッたらいいのかなって思つたら…」

あ～…そっか…

「ウザくなつたら殴つて構わん、親だろつが容赦はしなくていいからな？」

「分かつた！！」

よし、これで心配は要らねえだろ…

「行つてきま～す」

「行つてらっしゃい」妹達の声を背中で聞きながらドアを開けると…

「朝から楽しそうだにゃ～一護の家は～」

「こつちは良い迷惑だつての」

こいつは明石祐奈、家が近くで子供の頃から遊んでいた、まあ所謂幼なじみつて奴だ。

親どうしも仲が良いみたいで、家の馬鹿親父と祐奈の親父さんでよく飲みに行つている。

そして…お袋も同じだ…祐奈のお袋も、あの事件で死んでしまった。…変な事思ひ出しちまつたな。

「どうしたの？」

「いや…何でも無い」

過ぎた事を今更言つても仕方ないからな。

「ふ～ん…なら良いや～から、早く行こ～よ～一護！」

「わかつてゐるから、引っ張るんぢやねえよ。」

笑顔で俺の手を引っ張つてくる祐奈…

俺はあの時に誓つたんだ…」この笑顔を守るために…

きつとお袋達も、そう願つてゐるはずだ…

だから、俺は…」こいつをもつて一度と泣かせないようこするため

に…

それが、俺に出来る唯一の事だから…

「何してゐるの～？置いて行つちやうよ～」

「ああ、悪い！今行く！」

一話（後書き）

感想お待ちしています！

一話（前書き）

A S様、感想ありがとうございます！

「そういえば……一護って部活入るの？」

「部活か……考えてなかつたな。」

「まあ、色々見てから決めることにするぜ」

「ふうん、それなら一護バスケ部入れば？」

「でも、中等部のバスケ部つて弱いんじゃなかつたか？」

「え！？」

何、私今知りましたみたいな顔してんだ？」「こいつ……

「知らなかつた……」

「やつぱりか……」

「こいつ何かと抜けてる所あるからな、悪く言つなら馬鹿つてとこか？」

「馬鹿じゃないよ！……それに、言われるなら天然が良い！！」

「心を読むんじゃねえよ、それに天然も馬鹿も変わらねえだろ……」

「甘いね一護！！天然はステータスなんだよ……」

「はいはい」

と、祐奈の発言を軽く流しているうちに男子中等部の校舎が見えて来る。

「そんじゃ、俺はこっちだから」

「うん、バイバイ！……こっちにも遊びに来てね～」

「いや……それは無理だろ」

男子の俺が女子の寮に行つたら、色々と不味いからな……

そして、祐奈と別れた俺は校舎に向かつて歩き出した。

学校についてクラスに入ると「お早うーー」「ウイース」グハウツ
！？」

まず、最初に俺めがけて飛びかかってきたアホをラリアットで瞬殺

してから、クラスを見渡していた俺の頭に「よ～うーー護ーー」という声と共に衝撃が走る。

この声は…こいつも同じクラスかよ…ー

「痛つてえな！何しやがる恋次！」

「んだよ？ そう怒んじゃねえよー護」

こいつは阿散井恋次、見た目は不良みたいだが付き合つてみるとなかなか良い奴だ。

「そういえば、一護お前今日女連れて学校来てたな？」

「こいつ…要らん事を…！」

今の言葉に反応した奴らからの、殺氣が籠もつた視線が痛い程俺に刺さる。

なんかこれから大変そうだな…俺…

それから色々あつたが、今俺は始業式で学園長の話を聞いている。

しかし…「長え…」

話に三十分かけるとか有り得ないだろ！

「頭がか？」どうやら恋次に俺の呟きが聞こえていたらし。

「それもあるが、俺が言つてるのは話の方だ」

まあ、確かに頭長いけどな…ぬらりひょんかつての…

「それでは、これで始業式を終了する…」

やつとかよ…しかし、長かつたな～

「なあ、一護？」

「なんだ？」

「お前この後どうするよ?」

どうするって言われてもな…やる事と言えば、とりあえず…「部活見学に行くかもしんねえ」

「そうか、んじゃあ気が向いたらサッカー部に来いよー！」

そう、こいつはサッカーが滅茶苦茶上手い。

だから、中学入ったらサッカー部に入ると決めていたらしい…

「ああ、分かった」

そして、学校が終わつた後俺は部活を見て回る事にした。

結果…「決まらねえ～！！」

見るのに夢中になりますが、全部を見る事が出来なかつた……おれ
しかし、どうしようか……

考
え
な
が
ら
寮
に
向
か
つ
て
歩
く
俺
に
…

この声…祐奈かっ！？

そして、俺は悲鳴が聞こえた方に向かって走りだした。

この時、俺は知らなかつた……

この夜の出来事で俺の運命が大きく変わることを…

感想お待ちしています！！

二話（前書き）

獅子丸様、ゆや様、感想有難う御座いました！
後、この後アンケートがあるのでご協力お願いします！

(s.i.d.e祐奈)

「あ～疲れたあ！」

やつぱり部活はバスケにしようかな？

一護は弱いって言つてたけど・・・私が頑張つて強くすれば良いんだもんね！

でも・・・「もう夜かあ～」

こういう夜の日つて何か出たりするのかなあ？

「ガサツ」

「えつ・・・？」

う、嘘・・・でしょ？「お、鬼！？」

そう、今私の前に出てきたのは子供の頃に読んだ事のある絵本とかに描いてある鬼その物だった・・・

「なんや？姉ちゃん？ワシが見えるんか？」

に、逃げなきや・・・！

でも、体が動いてくれないつ！足も震えてる・・・

「堪忍してや？嬢ちゃん・・・見られたら殺さなきやいかんのや」

私の目の前に立つた鬼がゆっくりと手に持つた包丁みたいのを振り上げた・・・

「キヤーッ！」

助けて・・・一護！！

そう願つても来てくれるわけないか・・・と私はゆっくり目を閉じた・・・

私、死んじやうのか・・・お父さん、『ごめんね・・・

一護・・・私、一護に言おうと思つてた事言えなかつた・・・

でも、私を襲つ筈の痛みは全然来る気配がない・・・どうしたんだろ？

そして、目を開けた私の前には、望んでいた人がこっちを向いて笑

つていた。

でも・・・「つたぐ・・・まあ、無事で良かつたぜ・・・」その人は私をかばつて鬼に斬られていた。

(s i d e o u t)

(s i d e —護)

助けたはいいが、俺が斬られちゃ世話無えか。
あ～ヤバい、かなり血出てんな、意識飛びそうだ。
俺は立てなくなり、地面に倒れる。

「い、一護つっ！」倒れた俺に祐奈が駆け寄つて来る。

「じめんね、私のせいだ」と言つ祐奈の目から涙が落ちる。
…何やつてんだ俺はつつ…！
あの時…こいつを泣かせないつて…そう誓つたじゃねえか…！
たとえ俺が果てようが、こいつを…こいつをつ…守らなきやいけねえんだつ…！

震える足に力を入れ、ゆつくりと立ち上がつた俺の体が不意に熱くなる。

まるで…俺の中の血が熱くたぎつているみたいだ。

「な、なんや兄ちゃん！？あんた何者や…！」

鬼がこつちを見て驚いている。

理由は知らんが、「祐奈…怖かつたら田え瞑つてな？」

これからやる事をこいつに見せる訳にはいかねえ…
祐奈が目を瞑つたのを確認して、鬼の方に向き直る。
不思議だ…力が湧いてくる…これなら…

「覚悟しろよ、テメエ…！」

「なんや知らんが、やらな殺られるつて訳やな…」

覚悟を決めた鬼は俺に包丁を振り下ろしてくる。

だが、遅い…まるでスローモーションを見ているみたいだ。

難なく攻撃をかわした俺はカウンターで拳を鬼の顔面に叩き込む。

「ぐあっ…なんや兄ちゃん強いやないか…まるで百鬼の長、ぬうりひょんやで…」

「人を妖怪扱いしてんじゃねえよ」

「何言つとんのや？ そんないきなり髪伸ばしておいて何が妖怪じやないんや？」 「はー？」 「髪が伸びているだとー？」

「ほれ、見てみい」 鬼がどこからか出してきた鏡を見ると、髪が伸びた上に、色も橙から白と黒に変わっている。

つてか、こいつ鏡どつから出したんだ？

「そこら辺は気にしたら負けやで兄ちゃん？」

「心を読むんじゃねえ！！ サトリだろお前本当はつー？」

「鬼やで？ 正真正銘のな？」

なんか… 戰う気無くなつてきたぜ…

しかし… こいつそんなんに悪い奴に見えねえな… まあ、斬られたのはあれだがな… と考えている俺に鬼が声を掛けってきた。

「兄ちゃん、悪いけど時間や…」

「は？ なに言つて…」 途中で俺は言葉を止める… 何故なら、鬼の体が徐々に消え始めていたからだ。

「…お、お前…」

「悪かつたのう、兄ちゃん… ワシもこないな事したくないんや… せやけど命令されたら従わないかんねん…」

「こいつ… 本当は優しいんじゃねえか…」

そして、俺は自然に鬼に右手を差し出していた。

「なんや？ この手は？」

「握手に決まつてんだろ？」

「はははつ… ほんまに面白くなあ兄ちゃん！」

笑いながら鬼が俺の手を握るのとする。

が、それはどこからか飛んできた一発の銃弾が鬼の頭を貫通する事で阻まばれた。

「は…？」 一瞬何が起きたのか分からなかつた。

だが、目の前に居た筈の鬼が消えたという事を理解した俺に徐々に怒りが込み上げてくる。

二話（後書き）

アンケートの内容ですが、一護を女子のクラスに入れるか、それともそのまま男子のクラスで過ごすか？というものです。女子のクラスに入れたい！という人は、1をそのまま男子のクラスで！という人は、2と書いて下さい！

宜しくお願い致します！

期限は、今日から4日後でお願いします！

後、感想お待ちしています！

アンケート途中経過！

1、六票
2、一票

となっています！

A S様、香夜様、ゆや様、reina様、煌焰様、寒月牙斬様、
獅子丸様、ご協力ありがとうございました！

他の皆さんもアンケートもあと少しで締め切りなので、ご協力下さい

俺の怒声と共に体から抑えきれない殺気が放たれる。
確かにあいつは危害を加えたかも知れねえ……だからって問答無用で

やりやがつた奴等は隠れてゐつもつらつてゐるが・・・

「バレてんだよーーーそりだいんのまよおーーー。」

今の俺は妖怪化（？）しているせいか、目が異常に常に見くなっている。

だから、林の影に隠れている奴等が普通に見えている。

一人は俺に、もう一人は・・・

なるほど、まずは祐奈を安全な場所に逃がそうつてか?

「お前が俺の相手って事で良いんだよな？」

と、俺の前に立っている野太刀を持つたサイドポーターの女に声を掛け

「可が目灼ごぎ・・・?

「目的……だと? んなもん無いよ」

「嘘をつくなっ！－！ 狹いはお嬢様だろう－！－」

お嬢様……・・・詰?

「喰らえッ！－！神鳴流奥義、斬岩剣ッ！－！」

げつ！？問答無用かよつ！？

慌てて避けると、そこまで俺のいた場所が吹き飛んでいた。

「黙れ妖怪っ！！」

くわつーーー！」の声がいやううがあかねえーー

女に手を上げるのは気が引けるが……しょうがねえか……

まずは……「その剣を渡して貰おうか？」

「なにつー？」俺の言葉に女が動搖している隙を狙つて剣を奪う為に猛スピードで接近する。

「そつは行くかつー！神鳴流奥義つー！」

俺とこいつ：どつちが早いかつ……

そして俺と女の剣がぶつかり合つ直前に、どこからか誰かが割り込んで来た……

そいつは俺も良く知つてゐる顔だつた……

俺の拳を片手で受け止め、女の斬撃を刀で受け止めているそいつは……

「れ、恋次ー？」俺の親友の阿散井恋次だつた……

「誰だー？お前はつー！」

「あん？テメーこそ誰だよ？」と、恋次は怒鳴つてゐる女を面倒そくに見つてゐる。

「邪魔をするならば容赦はしないー！」「そつかい、そんなに死にてえなら別に止めねえが？」その声と共に恋次の体から凄まじい量の殺氣が溢れだす。

す、すげえ……さつきの俺より迫力あるぜ……

「貴様：妖怪をかばうとはつー！」「はあ？てめえが言えた事かよ

混じり物が

「つー！」

恋次の挑発で、明らかに女が怒り始めた。

「貴様あああつつー！」激怒した女が恋次目掛けて切りかかつて来る。

「一応忠告しておぐがな……頭に血が上つてると相手の実力をはかり間違えるぜ？」

そして、恋次が俺の目の前から消えたと同時に女が吹き飛ばされる。

「つ、強え……」啞然としている俺の前に恋次が戻つて来る。

「なに、ボーッとしてんだよー！行くぞー護ー！」

「ど、どこにだよー！」

「俺達の部屋に決まってんだろ？がー…それに…お前に敵も来てるしな…」

四話（後書き）

感想お待ちしています！！

五話（前書き）

A S様、感想ありがとうございます！
連投なので出来が心配ですが…

客つて……一体誰だ？

恋次に連れられ、部屋のドアを開けると、そこには予想もしていなかつた奴がいた……

それは……「お、親父っ！？」

「よう、一護」と二つちを見て手を上げて笑っている親父だった。

「連れて来ました、一心さん」

「ああ、」と苦笑だったな恋次

あれ？この一人つて知り合いだつたか？

「つてか、一人で話進めるんじゃねえよ……！」

「わかつてゐ、そう焦るな一護……」

・・・こいつ本当に親父か？いつもとまるで雰囲気が違え……

「それじゃあ話すが、まず一護……魔法を信じるか？」

・・・・・あ、そういう事か！

「悪い……親父っ！！俺が殴つたり蹴つたりしたから、ついに頭がおかしく「なつてねえつ！！」ぐはあつ！？」

親父のパンチを顔面に喰らい俺は壁に叩きつけられる。

「つたく……もう面倒だから魔法があると仮定して話をすのぞ？」

「お、おう……」

「まずは、もう氣づいただろ？がお前は妖怪だ」

やつぱそうなのか……

「そして、俺もだ」

「親父もか！？」「ああ、ただし俺は一分の一が妖怪の血でお前は

四分の一が妖怪の血だ」

それつて……夏梨達にも！？

「夏梨達は心配無い……血が薄まつていて影響は無い」

「そう……か」良かつた……！

「さて、ここからが魔法の話だ……」

それからの話は俺を驚かせるばかりだった。

「…簡単に言うと、こういう事か？親父は魔法世界で大戦を終わらせた紅き翼の一員で、しかもぬらりひょんでかなり強かつたと？」

「まあ、そんなところか」

親父が…英雄で妖怪ねえ…なんか複雑だな。

「それでだ、一護」

「なんだよ？」

「お前はどうしたい？」

「どう…したいか？」

俺は…もう一度とあいつを泣かせる訳にはいかねえんだ…！
だから…

「俺は強くなりてえ…守りたい奴を守れるよ！」…」

「そうか、なら鍛えてやる…付いてこい」

親父に言われ、ついて来た場所は…

「ログハウス？」俺の側で恋次が震えているのが気になるな…

「どうした？恋次？何震えてんだよ？」

「直ぐに分かるぜ…」

どういう意味だ？と聞く前に親父がドアをノックする。
そして、出てきたのは…

「どうぞ黒崎様、マスターが奥でお待ちです」

「おう、済まんな茶々丸」

「ロボット…？」あれ、どう見てもロボットだよな？

「おい、一護！置いていくぞ！」「ちょつ！待てって…！」

そして、親父達の後についてログハウスの中に入ると…「一心、随分と久しぶりだな？」

「ああ、そうだなエヴァ」

親父と会話をしている金髪の女の子がいた。

五話（後書き）

感想お待ちしています！！

六話（前書き）

アンケートの結果ですが…

一護を女子のクラスに入れることができ決まりました！！

アンケートに協力してしてくださった皆さん、本当にありがとうございました！！

後、獅子丸様、小元数乃様感想ありがとうございました！！

ちゃんと、ご指摘通りになつていると良いんですね…

それと、今回はかなり短いです…

「ほつ？ そいつがお前の子供か？ 一心
「まあ、そういう事だ」

「…」

「…」

「違うわ、このボケがああ！！」

「だから、心を読むなつた：ぐああつー？」

俺に本日二度目の顔面へのWパンチがクリーンヒットし、吹っ飛ばされる。

…あの子、意外に力があるじゃねえか…！

「あれか？お前の子供は受け継いではいけない所だけ受け継いだのか？」

「違えよー！ ってかそれって遠まわしに俺の事を馬鹿って言つてるよな！？」

「別に私は間違つたことは言つておらんが？」

畜生…完全に舐められてる…

「つていうか、親父…！…この子誰だよ…！」

すっかり馬鹿騒ぎで忘れてたぜ…

「ん？ こいつはエヴァンジエリンA・K・マクダウエル、現在600歳の吸血鬼だ」

へえ…600歳ねえ…ずいぶんど、長寿なことで…

「…は？ 600歳つて…ババ…」

死にさらせえつ…！…

「ゴッハアツ…！」

いや…マジで痛いからつ…！…パンチを顔面に叩きこまれると…！

「全く…躾がなつていなーな！」

「パンチ顔面に叩き込むババアに言われたくねえな…！」

あ…しまつた…またババアって言つちまつた…！」

「ほ～う～。そうかそうか… そんなに自分の血の雨が見たいのか…？」
いやいやいやつ！？ 何その剣つ！？ そんなの振り下ろしたらつ…！？

「マスター、別荘内でお客様がお待ちですから…」

「むつ… せういえばそうだつたな」

茶々丸の言葉でエヴァンジルの剣が俺の目の前でギリギリ止まつた。

助かった……のか？

だが、それはエヴァンジルがじつに向けた笑みで間違いだと
いう事に気がついた。

「続きは向こうで殺るうか？」

その言葉を聞いた俺は回れ右をしてその場から逃亡を図つたが、当

然上手くいはずもなく…

「やめろつー！ 放せつー！」

「うつせえーーーとつとと逝くぞーーー！」

「字が違えええつつーーー！」

六話（後書き）

感想お待ちしています！！

七話（前書き）

獅子丸様、雪門様、感想ありがとうございました！！

恋次に無理やり引きずられ、ついたのはエヴァ（エヴァンジエリン）つて言つのが面倒だから俺が勝手に省略した。）の家の地下だ。

「こんな所で修行すんのかよ？」

「ケケツ、チゲエナ…ヤルノハゴ主人ノ別荘ノ中ダゼ」

「…ん？ 今のは誰の声だ？」

慌てて周りを見回した俺の目が壁の近くにある一つの人形を捉える。まさか…「これか？…いやいや人形が喋るわけないか…」

「トロロガ喋レルンダナ、コレガ」

と、俺の前にある人形の口が動き喋り始める。

「魔法つて本当に何でもありだな、おい…」

「ん？ 何だチャチャゼロか？ いたのかお前？」

「ケケツ、ナニ言ツテヤガル？ モトモトハゴ主人ノセイダロウガ」

「はつ！ そう言えばそうだったな？ 封印のせいでお前は動けないんだつたか！」

なんだこいつ、なんか呪いでも掛けられてんのか？

試しにエヴァに聞いて見ると、予想していなかつた答えが返つてきた。

「私に掛けられている呪いはな…登校地獄の呪いだ」

「はあ！？ 何そのショボい呪い！？」

「そのせいでは私は13年間中学生をやつしているんだ…全く恵々しい…！」

「えへつと…ドンマイ（笑）」

「今、お前他人事だと思つただろつ…？」

「イエイエ、ベツ…」

チヤチヤゼロのようにに片言になりながらも必死に視線をエヴァと合わせないようにする。

「ふん、まあいい…とりあえず行くとしようか？」

と、エヴァが奥から引っ張り出してきたのは…

「あ～… やつぱ見た目はガキだからそういう玩具で遊びたく「なんわボケつ！！」「ぐはああつつ…？」

いや…マジで痛いって…！…仮にも女の子なんだから蹴りは止めろつて…！」

「まあ、馬鹿には見せた方が早いか？おい… 一護ちょっとこいつに来い」

なんだ？なんかあるのか？

そう思いながら、エヴァが出してきた玩具のような物の前に立った瞬間に目の前の風景が変わった。

「うわ！？な、何だここ…」

そこに広がっていたのはリゾートのような光景だった。

「ここにはドラマ魔法球と言つてな、ここでの一時間は外の一日になるという優れ物だ」

いつの間にか俺の横に来ていたエヴァが説明した。

「へ～… 随分と便利だな」

「でも、ここに女の子が入ると老けやすくなるんだつて～！」

「そいつは「愁傷様… つて～？」

後ろを振り向くとそこには俺も良く知つてゐる奴がそこにいた。

「ゆ、祐奈つ…？」

「ヤツホ～一護！！」

な、何でこいつがここに…！？

「私が連れて來たんだ」

「はあ！？何勝手に…」

「違うの一護…私が頼んだの…」

「祐奈が頼んだ？ いつたいどういふ事だ？」

「簡単に言つとな？ お前は一心から魔法は隠す物だとこいつとは聞いただろ？」

その問いに俺は頷いた。

「明石はな、魔法の存在を知つてしまつただろ？だからこの町の

正義の魔法使い共が、こいつの記憶をいじるかそれとも… とこうと
ころで私が面白そだつたからこいつを預かつたという訳だ… まあ、
本人も強くなりたかつたらしいしちょうど良いだろ?「.
… こいつが決めた事だ… 僕が口を出す義理は無い。

だが、どうなるが俺がこいつを守るつて事には変わり無え… その
ために俺は強くなるつて決めたんだ!!

「わかった、じゃあエヴァ… そいつを頼んだ」

「こいつが鍛えるんだ、強くなるに決まつていいわーー」

わて、祐奈はエヴァに任せるとして…

「さあ、親父… とつとと始めよつぜーーー」

「ふつ… そうだな… それではまず畏を留得してもらおうか?」

畏…? なんだそれ?

「まあ、わかるよつに説明してやる… まずはだ… 妖怪がする事は何
だか分かるか?」

「… 人をビビらせる事じやねえのか?」

「その通りだ… 個々の妖怪には人々を恐れさせる特徴がある… 例え
ば俺たちぬらりひょんは…」

その言葉が終わると同時に親父が俺の目の前から消えた。

「はあー?き、消えた!?

「消えてねえよ! 目の前にいるだろ?がー!」

その言葉と共に再び親父が目の前に現れる。

「これが… 畏…」

すげえ… これを覚えれば… ! !

「よし、一護… 早速妖怪化してみる」

「ああーーー」

よし……

あれ? セツ言えばどうやつたんだつたつけ?

「自分の中の妖怪の血をたぎらせる感じだ」

「おお、サンキューーーー」

んじゃあ、もう一回…

自分の血をたぎらせる感じで…

「ゾオオオツツツ」

俺にあの時と同じ力が湧いて来る。

「やりやあ出来るじやねえか」

「ああ、悪いな…手間かけてよ…」

「はつ…急に偉そうになつたなー護?」

「無駄口は良い…とつとと始めるぞ親父」
試しに親父がやつた技をやつてみたが…

「できねえ…」

「どうやつてんだよー?全然分からねえ…」

「心を落ち着かせろ…そして、その状態で相手を威圧しき」
…心を落ち着かせて…そして威圧するつ…!

俺が今出せる限りの殺氣を親父にぶつけん…

「ほーう…やりやあできるじやねえか…いいか一護、俺たちぬうりょんはその畏を明鏡止水と呼んでる。」

「明鏡止水…か…だが、これだけだと…」

「分かっているさ、だからこそ俺たち妖怪は次の段階に進むんだ」
次の…段階だと?

「それは相手の畏を断ち切る技だ、その名は鏡花水月…まあ、今回
はそう簡単に行かないかもな?」

「それを覚えれば俺はもっと強くなれるんだろ?だつたら覚えるさ
死ぬ氣でな!!」

そして、俺の修行が再び再開された…

感想おまちしてます！！

八話（前書き）

獅子丸様、感想ありがとうございました！！

後、最近多い質問で織姫などの女性キャラを出すんですか？？？となるんですが

すいません…出しません…

ですが、二人ぐらいbleachから男性キャラが出てきますので
楽しみに待っていてください…!!

「ガキイン、ガキイン！…」

「うおおおおつ！…！」

「はあああつ！…！」

剣と剣のぶつかり合う音が辺りに響きわたる。

その音を発しているのは言うまでもなく俺と親父だ。

「畏を技として昇華しろ」

と、親父に言われたものの俺はその手掛けりすら得る事は出来なかつた。

くそ…確かに簡単には行かなそうだ。

「おりつ！…考え事とは余裕だなー護つ！…」

「しまつ…」

「ド、「オオーン！…」

考え事をしていた俺は親父に容赦無く蹴り飛ばされ壁に叩きつけられる。

「ふう…もう一つヒントをやるつ…ぬらりひょんはどんな妖怪か、それが分かれば鏡花水月を習得出来る手掛けりになるはずだ。」
ぬらりひょんがどんな妖怪か…？

考えた事もなかつたな…

「まあ、外にでも行つて気分を切り替えてくると良いぞ…あ、後、外に行く時でも妖怪化を解くんじゃねえぞ」

「ああ、分かつた。」

そして、俺は親父に言われた通りに外に出て気分を切り替えることにした。

外に来たのは良いが…

「やる事無え…」

行くあても無く俺は町をぶらついていた、俺が修行している間に雨が降つたらしく辺りは水たまりがある。

その中の一つに俺の目が惹きつけられた。

「あれは…」

それは、水たまりに映つていてる月だ。

それを見た俺の頭にある光景が蘇つてきた。

「確か…」

(六年前)

「わ～お母さん！！見て見て～池に月が映つてるよ～」

「あら、本当ね～一護」「護」

嬉しそうに池に駆け寄つて行く俺をお袋は笑いながら見ている。

「あれ？消えちゃつた…」

俺が池に手を入れると、それまで映つていた月が消えてしまった。

「ふふっ、一護…手を抜いてしばらく待つてみなさい」

お袋に言われた通りにしてみると、池に再び池に月が映つた。

「わ～凄い！！この月つて見えるけどここには無いみたいだねお母さん…！」

「そうね、鏡みたいね…まだ一護にはわからないかも知れないけどこれを鏡花水月つて言うのよ」

「きょーかすいげつ？」

「そういえば…こんな事あつたな…」

鏡花水月つてどつかで聞いた事あると思つたら…あの時か
「そこにあるよ？でそこにはない…か」

もしかしてこれが鏡花水月の手掛かりなのか？

そんな事を考えながら歩いていた俺の耳に何か言い争つよ？な声が

聞こえてきた。

その声が聞こえてくる方を見ると、三人の女の子に何やら絡んでいる不良共がいた。

「あ……ああいうのまだいやがつたのかよ？」

呆れながら見ていると、女の子の一人が不良を突き飛ばし逃げて行く。

「あ～あ……あれはちょっとヤバいかもな……」

逆上した不良共が女の子達を追いかけて行く。

「しゃ～ねえな……助けねえと色々ヤバそうだ……」

急いで追いかけて行くと不良に追いつめられ、絶体絶命の女の子がいる。

どうやら、女の子の中のボーカルの子が足をくじいたらしく動けないでいる。

しかも、不味い事にさつき不良を突き飛ばした子だった。

「生意気なんだよっ……」のガキが……」

不良の中の一人がその子を殴りつとするが……

それを俺が腕を掴んで止める。

「あん！？ 何d 「はい、おやすみなさい～」 ゲポアアツ！？」

そいつを殴り飛ばすと、間抜けな声を上げて吹っ飛んでいく。

「あ、あっちゃん！？」

「テメエっ！ よくもあっちゃんをつ……」

あっちゃんつて……ネーミングセンス無えな、おい……ん？あの子達も俺と同じ事を考えてそうな顔してんな……

「おい、テメエ……俺達ワイルドスターZに手を出してただで済むと思つんじゃねえぞ……」

「「うわ……ネーミングセンスが……」

俺と殴られそうだった女の子の声がハモつた。

「つるせえ！ もうとけ……」

自覚があるみてえだな……まあなかつたら……

「愁傷様つて事で……」

「やつちまえつ……」

「「「おつり……」」

わて……掃除の時間だな……

(五分後)

「は～終わつた終わつた～」

不良共を五分足らずで愉快なオブジヒ（死体）にした俺は女の子達の方を向いた。

「大丈夫だつたか？あんたら？」

「「「…………」「」」

ん？反応が無い……ただの屍のようだ……ってそんな訳無えか？

「お～い……もしも～し……」

「は、はいっ！？」

「やつと反応したか……怪我無えか？」

「あ、はい……」

と言ひながら立とゞとする女の子の顔が歪んだ。

「痛つ……」

「なんだよ、怪我してんなら無理すんなよ……ほひ、背負つてやるからこつち来な？」

「えつ！？そんな事……助けてもらつただけでも悪いのに……」

「田～遠慮しないで良いよ～その人に送つてもらひなよ～」

「そつそつ！～私と美砂は先生とかに連絡しないといけないし……」

よし、話もまとまつたみたいだし……行くとしますかね……

「そ、そんな……」

ん～……面倒だから……無理やり背負つつか？

「よこしょつと」

「キヤつ！？／／／」

背負われるのは嫌だつから……抱きかかえる」とこした。

まあ、どつちも嫌だらうがしょつがないか……

「そんじゅあ、寮に送るつて事で良いよな？」

「は、はいつ」

そして、残つた二人に気を付けるように言つてから女の子を抱えて去つていつた。

その後

「「あつ！名前聞くの忘れたあつ！…」と残された一人が叫んだ事を俺は知る筈もなかつた。

(円 side)

「あ、あの…恥ずかしいんですけど…」

「嫌だらうけど我慢してくれ」

…嫌というか、むしろ…

はつ！何考えてる私！？

た、たしかに、助けてもらつた時はかつこいいと思つたけどつつ／＼

顔がどんどん赤くなつていくのが自分でも分かる。

「ん？顔赤いけど、大丈夫か？」

そう言つた男の人気が心配そうに顔を近づけてくる…

ち、近いっ！…／＼／＼

でも、近くで見ると余計かつこいいな…

彼女とかいるんだろうな…と言つかいないと可笑しいでしょ。

聞いてみようかな…？

「あ、あのつ！…」

「ん？どうかしたか？」

「な、名前教えてもらつても良いですかつ！？」

恥ずかしくて別の事聞いちゃつた…流石に初対面の人に聞く内容じゃないし…

「黒崎一護だ、そつちは？」

「釘宮円です、あの、さつきは助けてくれてありがとウイゼンまし

た黒崎さん！」

「さんはいいぜ、 同い年っぽいし…… 一護つて呼んでくれ

え……？ こんなに大人っぽいのに私と同じ年なの！？ 意外だな

「それじゃあ…… 一護君で良いかな？」

「あ、 良いぜ、 よろしくな円」

「うん、 よろしくね 一護君」

（一護 side）

「帰つたぜ」 親父

「おう、 遅かつたな 一護」

別荘に帰つてきた俺を待つっていたのは親父と恋次だった。

「どうだ、 一護…… なにか掴めたか？」

「さあ、 どうだろうな？ まあ、 少なくともぬらりひょんがどんな妖怪かは分かつたけどな」

「ほう…… それじゃあできる筈だよなつ……！」

と、 親父が切りかかってくる。

だが、 俺はそれを避けない…… いや、 避ける必要が無い。

なぜならそこに…… 俺はいないからだ。

そして、 親父が俺の幻覚を切り裂いた直後に後ろをとる。

「鏡花水月……」

この技は相手の認識をずらすことで相手を攪乱する技だ、 そう、 あの時の月のようにそこにはいるようでいない…… それがこの技の本質だ。 「はつはつはつ…… いや驚いた…… まさかこんな短期間で明鏡止水と鏡花水月を会得するとはな…… さすが俺の息子と言つたところか……」

「これで、 修行は終わりか？」

「いや…… これからが本番だ」

その声と共に親父の持つてゐる刀が俺の腹を貫いた

八話（後書き）

上手くかけたかどうか…（汗）

感想お待ちしています！！

九話（前書き）

雪門様、一ツ「ヨリ様、感想ありがとうございます」とおっしゃいましたーーー！

p v 3 0 0 0 0 突破致しましたっ！！！

皆様ありがとうございます！！

「お、親父？」

俺は自分の目が信じられなかつた。

だが、現実は変わらない…

そう、現実は俺の腹を親父の刀が貫いている…ただ、それだけだ。

「テメエ…つ！？何しやがるつ！…」

そう言つた後に俺は氣付いた…

「痛く…ねえ？」

そう、全くと言つて良い程に痛みが無い。
むしろ、俺の中に何かの力が流れ込んでくる。

畏とは違う何かが…

「ドオオオオツツツツ…！」

俺を中心にもの凄い爆発が起きた。

(恋次 side)

……上手くいつたのか？

最初に一心さんから聞いた時はとんでもねえと思ったが…鬼が出る
か蛇が出るかだな。

ん？土煙が晴れてきたな…さあ、どう…

……俺は目の前の光景が信じられなかつた

一心さんの計画は確かに成功した…

だが、明らかに異常すぎる…

「ふう、なんか変な感じだな…」

「変なのはお前だ一護つ！！何だそのバカデカい刀は！？」

一護が持つてゐる斬魄刀は明らかに大きすぎる…

「ん？何だこれやつぱデカいのか？」

「当たり前だつ…！」

俺のやつの一倍はあるぞ！？

こりや… 鬼も蛇も両方出てきちまつたんじゃ ねえのか？

(一護 side)

ん… 恋次の奴が何か失礼な事を考へて いる気がしたが… 気のせい
か？

だが、そんな事は置いといてだ…

「俺に何したんだ、親父？」

「なに、新しい力を与えてやつただけだ」

「いやいやっ！？ 偉そうに言つてつけど下手したら俺死んでたから
な！？」

「いや、大丈夫だ、死ぬ事は無えつて分かつてたからな」
…は？ 何言つてんだこいつ？ それにこのバカでかい刀の事も聞い
てねえし

「まずはだ… 恋次… こいつに見せてやれ」

「わかりました」

と、恋次が刀を抜き…

「吠えろっ！ 蛇尾丸っ！！」

と、叫んだ瞬間に恋次の刀の形が変わった。

「お～っ！！ 漆えな～」

何か手品みてえだな…

「これが、始解つて奴だ」

「始解？？」

「ああ、俺が持つてゐる斬魄刀やお前が持つてゐる斬魄刀にはそれぞれ
名前があるんだ、俺の場合は蛇尾丸つて名前だ、その名前を呼ぶこ
とでその斬魄刀の力を引き出す… それが始解だ」

それじゃあこの斬魄刀にも名前があるつて事か…

「よし、んじや早速修お「ちょっと待て」 んだよ？」

何で止めんだ？ 親父の奴…

「修行はお預けだ」

「はあ！？何でだよ！？」

「テメエは学校だろうが……」

……やつべ忘れてたつ……

「ふん、私としては学校に行かずに鍛えてやつても良いんだがな」「いやいやつ！？それ以上やつたら祐奈が死ぬからな！？」

「死ぬ直前までやるのが修行だろ？？」

鬼だ……

俺も修行の合間にエヴァと祐奈の修行を見たが……

鬼畜以外の何者でもなかつたな。

まあ、修行内容は簡単だ……エヴァの撃つ魔法をひたすら避けるつてもんだ。

最初聞いた時は随分簡単だ……と思つたが……

見た瞬間、目が点になつたな……うん……

だつて、絶えず百発以上の攻撃が襲つて来るんだぜ？死ぬつての普通……

エヴァが言つには「体力作りの一環」らしいが……

でも、間違い無く体力は上がつてゐるな……

つてか、上がつてなかつたら可笑しいだひ。

「も、もう一步も動けない……」

「ご愁傷様としか言いようがねえ……」

そして、バテた祐奈を女子寮まで送り（明鏡止水は勿論使つた）俺達は自分達の寮に戻つた。

そして、次の日……

まだ、あれから一日しか経つてねえんだよな……未だに信じられねえ……

と、俺が教室で一人考え込んでいると「ピンポンパンポン～」1・Aの黒崎一護君、阿散井恋次君、学園長室に至急来てください「

「はあ？ 何かしたっけ？ 僕？」

「行ってみねえと分かんねえだろ？」

「まあ、 そだけどよ…」

そして、 僕と恋次は学園長室に向かう事になった。

「なあ、 恋次…」

「あん？」

「明鏡止水使つちゃ 駄目か？」

「気持ちは分かるが… 使うな」

何故俺がそんな事を聞いたか… それは学園長室が女子のエリアのど真ん中にあるからだ。

何かクラスの奴らが羨ましそうな顔してたが… こういう事かこれじゃあ、 いつ不審者扱いされるか分からねえぞ… ？

と、 僕が考えていた矢先…

「ちょっとアンタ… ここは女子校よ… 何で男がいんのよつ… ？」

後ろから誰かに怒鳴られる。

後ろを向くと、 両目がオッドアイで鈴の髪飾りを付けた女の子が俺達を睨み付けている。

「学園長に呼ばれたから、 仕方ねえだろ？」

「そんな事言つて、 変な事するつもりでしょ… ！」

「恋次… つ！ 助けてくれっ… ！」

これ以上言つても聞かなうだから恋次に助けを求めるが…

「知らん、 勝手にやれ」

「薄情者っ… ！」

「そつ… どうすればっ… ？」

助けを求めて辺りを見回すと、 見覚えのある顔を見つけた。

丁度いいことに、 あっちも俺達を探していたようだ。

「タカミチ… つ、 助けてくれ」

「何してるんだい？ 一護君に阿散井君… ？ それに神楽坂君も… 」

この、 シブい人は高畑・T・タカミチ、 僕の親父の飲み仲間だ。

ガキの頃によく遊んでもらつていて、仲が良い大人の一人だ。

助かつた～っ！！

俺は早速事情を説明し、タカミチの「彼らは本当に学園長に呼ばれているんだよ」発言で

神楽坂とかいうやつもタカミチの言葉で納得したようで…

「勘違いしてごめんなさいっ！！」と、素直に謝つてくれたので

「いいぜ、別に気にしてねえからよ」と、許す事にした。

そして、神楽坂と別れ、タカミチの案内で学園長室に向かった。その途中で、「何で学園長室つて女子のエリアのなかにあるんだ？」

と聞くと、

「あはははは…」と笑つてはぐらかされた。

……趣味でここにしたとかねえよな？……急に心配になつてきました、おこーーー！

「さあ、着いたよ」

考へている間に学園長室の前に着いたらしい。

「コンコン」

「高畠です、二人を連れてきました」

「うむ、入つてよいぞ」

という声を聞いた後にタカミチの後に続いて俺達は学園長室に入る。

「黒崎一護君、阿散井恋次君、」と苦労じやつた、そして黒崎君に至つては昨夜は巻き込んでしまんかつたのう

そこにいるのは言つまでもなく学園長だ。

……やっぱ、ぬらりひょんにしか見えねえ……

そんな事を考へていると、俺の頭にある考へが浮かんできた。

「あれ？もしかして俺も老けたらこいつなるのか！？」

やべ…テンション下がってきた。

「フオッ！？」いま途轍もなく失礼なことを考へられた気がする「

気のせいです」そ、そつかの？」

「それより、学園長本題を…」

「う、うむ…それでは早速じゃが…君たち一人にはこの度女子クラ

ス1 - Aに入つても「うれしい」

.....ん? 今この糞じじい何か変なこと言つたよな?

女子クラスに入れだと?

「恋次...」

「ああ」

俺達一人は無言で斬魄刀を指輪（親父に、斬魄刀を収納する為に貰つた）から取り出す。

「フオツ! ?ち、ちょっと落ち着くんじやつ! -!」

「遺言なら後で聞きますが?」

「殺す前提なのかのう! ?」

「勿論」

「まあまあ、落ち着いてくれ二人共」

まあ、タカミチが言うなら... といつことで斬魄刀を指輪の中に戻す。
「ふむ...」この度は男子と女子を共学にするかもしれんという計画が
持ち上がつての? 試験生として一クラスから一人の男子生徒を女子
クラスに入れることとなつたんじやよ

「で、俺達をつて訳ですか?」

「うむ、そういう事かのう」

「まあ、そういうことなら...」

と、恋次の方を見ると頷いてくる

「うむ、そういう事なら今日からで良いかの?」

「わかりました」

「ああ、後今日の午前0時に世界樹広場に来てくれんかの?」

「だが、断るつ! !」

「フオツ! ?」

「冗談です」

その後、学園長室を出てタカミチにクラスに案内してもらつ
その途中でクラス名簿を見せてもらつと...

「いや、可笑しいよな? このクラス! ?」

祐奈からはじまりエヴァや茶々丸や昨日戦つた女剣士や円...

「これは仕組まれているとしか言いようがないな…

まあ、良いか…

「さあ、一護君、恋次君入ると良…まあ一応言つておくれど…氣を付けてね」

「ん?なぜ氣を付けなきやいけないんだ?まあ入つてみれば分かるか…

そして、扉を開けると…上から黒板消しが落ちてくる

へつ、この程度…あの修行に比べれば…

樂勝だこの野郎っ!!

落ちてきた黒板消しを避け、ついでにバケツもキャッチする。

そして、足元に張られた紐を躲し飛んできたおもちゃの矢をバケツで受け止める。

「「「おお~っ…」」」

驚きの声がクラス内に響く…若干一一名、田を輝かせていくが…悪い予感しかしねえ…

「はい、みんな座つてくれ」

「「「は~い」」」

立つて騒いでいた奴らをタカミチが座らせる。

「みんな聞いているとおもうが、この度男子と共学になるかもしきない」ということで男子の試験生を各女子クラスに一一名編入させることがなつたんでね、うちのクラスは黒崎一護君、そして阿散井恋次君が入る事になつた…さあ、一人とも自己紹介をしてくれ

「黒崎一護だ、よろしく」

「阿散井恋次だ、よろしく頼む」

「「「…」」」

あれ?なんか俺達変なこと言つたか?

恋次も俺と同じことを考えているらしく、困惑した顔をしていく。だが、この心配はどうでもよかつたことがすぐに分かつた…なぜなら…

「「「かつこにこつ~!~!~」」」

クラスの大半の女子が悲鳴に近い叫び声を上げ、俺と恋次の鼓膜が
破れそうになつたからだ。

「ねえねえ、何歳？」

「いや、普通に考えて同一年だろ」

「拙者と勝負でござる……」

「忍者……だと？」

俺と恋次の声が見事にハモつた。

「忍者ではないござるよ？」

「その語尾直してから出直してこい」

と、周りが女子に囲まれカオスな状態になつてきた…
そこに、「はい！…ここからは麻帆良のパパラッチ」と朝倉和美
が皆の代わりに質問するよ～

と、一人の女の子がこの場を取り仕切り始める。

「つてか、パパラッチって自分で言つて良いのかよつ！？」

「そこら辺は気にしない方向で～

朝倉に俺がツツコむがあえなくスル・される。

……つてかさつきから祐奈からビシバシ殺氣が籠つた視線が飛んで
きてるんだが…

俺のせいじゃなくね？文句は学園長に言つてくれや…

まあ、別の意味で殺氣飛ばしてきてる奴もいるけどな？

その方向を向くと予想通り昨日の女剣士が俺と恋次を睨み付けてい
る。

はあ、面倒だから放つておくか。

「それじゃあ、最初の質問～！…一人とも彼女はいるの？」

「いねえ」

「そ、即答…つて」

その後、朝倉からの質問が続きHRは終了した。
はあ～これから大変そうだな～

(午前0時)

(タカラミチ side)

「学園長つーーーべから英雄の子だからと言つて遅れるのも限度があります……」

ガンドルフィー「先生の言つ通り…どうしたんだー護君？」

まさか本当に来ないつもつじや……？

「はあ？別に遅れてねえぞ…さつきからここにいるだろ？が

「なつ！？」

あれは…明鏡止水か！？いつの間に…

しかも、

「わ、わしの後ろを取るのはやめてくれんかの？…」

ちやつかり学園長の背後を取つているし…

「さあ、一護君も来た事じやし…早速始めるとするかの？…」

「なにすんだ？」

「力試しと言つひとで…さうじやな…刹那君と模擬戦でもしてもらおうかの？？」

「なつ！？が、学園長つそれは…！」

昨日の桜咲君と一護君の事があるとこつて…何を考えているんだ

学園長は…！

「別に良いぜ？今日の朝からそこつに殺氣がぶつけられつ放しでイラ

イラしてんだ」

一護君も桜咲君を挑発するようなことを…

「私も構いません」

「つむ、では両者前に出てくれるかの？」

そして、一護君と桜咲君が前に出て向かい合つ。さあ、どうなることや？…

(刹那 side)

また、こいつと戦うことになるとは…
だが、丁度いい…この間の決着をつけてやる…!
あの赤髪の男も邪魔することはできないしな…
真名が気を付けると言つていたが…昨夜程度の実力なら警戒する必要すらないな。

「昨日は運が良かつたな? 妖怪」

「そりやどうも」

私は夕凪を鞘から抜き放ち目の前の妖怪を挑発するが、まったく奴は動搖すらしていない。

「まあ、弱いやつ程よく吠えるつて言つけど間違つてねえかもな?」

「なん…だと!?」

くつ…落ち着くんだ…相手の挑発に乗つては冷静さを欠いてミスをしてしまつ…

まずは…

「初めつ!…」

先手を取るつ…!

「斬岩剣つ!…!」

私が放つた斬撃はそのまま奴に向かつて行く…

…?何故避けない!…喰らえればただでは済まないぞ!…?

そして、私の放つた斬撃が奴を切り裂いた…

「そ、そんなつ!…?」

まさか…そんなつ!…?

「おい、何処見てんだ?」

「なつ!…?」

切り裂いた筈の奴がいつの間にか私の背後に立つている。

「いつの間に!…!」

咄嗟に背後を切り裂くが…

「手応えが…無い?」

「そら、こつちだ」

くそつ……ひよこまかとつ……

「はい、お終いな」

そしていつの間にか私の首筋に後ろから剣が添えられている。

「……降参だ」

(一護 Sōsuke)

やつぱこの程度か……

まあ、明鏡止水も見破れないのに鏡花水月を破れる訳ないか。

「そこまで……つむ」一護君、桜咲君ご苦労じやつたな

「はあ～つまんねえ事で時間使つちまつた」

早く帰つて始解を覚えなきやいけねえのに……

「……だ……と?」

「あん?」

「つまらないだとつ……！」

「ああ、つまんなかったな、自分の力も見極められない奴との戦いなんかつまらないとしか言によつがねえ……まあ、もつと強くなつたら今言つたことは撤回してやるけどな」

悔しそうにしている桜咲を置いて俺は去つていった。

九話（後書き）

前話にbleachの男性キャラを出すということを書きましたが、予定としては

グリムジョーとウルキオラを出したいと思います。

出てくる時期は

グリムジョーはヘルマン編

ウルキオラは修学旅行編辺りで出したいと思います！！

後、感想お待ちします！！

十話（前書き）

獅子丸様、ノッポガキ様感想ありがとうございました！！

40000PV突破致しましたっ！！

皆さんありがとうございます！！

あれから一年…

俺は恋次との修行で始解を手に入れた。
名前は斬月、能力は俺の魔力を喰つて強力な斬撃、月牙天衝を放つ
というもんだ。

試しに威力を見てみよつと思つて別荘の海に月牙を撃つてみたんだ
が…

威力が半端じやねえ… 海が割れるつて… どんだけだよつ！？
その後エヴァにもちろん怒られて氷漬けにされたけどな…

そして、今は卍解つていう始解の更に上の段階の修行をしている。
祐奈はといふと、もの凄い成長速度らしい（エヴァが言つには）
強さで言つたら下手したら俺や恋次よりも強くて、魔法先生（タ力
ミチと学園長を除く）よりも強いらしい。

そして、今は闇の魔法（マギア？エレベア）を習つている。
ちなみに、祐奈の魔法の属性は風と雷らしい… それが分かつた時の
エヴァの複雑そうな顔はなんだつたんだ？

…まあ、良いか…

「おい、一護、そろそろ切り上げるぞ…」

「ああ、わかった」

恋次に言われ、修行を切り上げた。

そして、その後エヴァの家で朝飯を食つて学校に行くのが普通にな
つてきている。

まあ、寮があるつぢやあるんだが…

あそこはヤバい…他の男共に「裏切り者には死をつ…！」とか言
われて殺されかかったからな…

文句は学園長に言つてくれつて、マジで…

「それにしても祐奈の魔法の上達ぶりは凄えな～」

「え～？ そうかなあ？」

「そう謙遜することはないわ、」この一年で上級古代魔法まで覚えるとはこの私も思つていなかつたからな」

「えへへ～エヴァちゃんにまで褒められると何か照れるこやあ～」と、祐奈は俺とエヴァに褒められ、まんざらでもなさそうな顔をしている。

「あつ～～そ～～う～～ば～～エ～～ヴァ～～ち～～ゃ～～ん、雷の斧から繋げやすい魔法つて何？」

「そうだな…」

エヴァと祐奈が魔法の話で盛り上がり始める。

俺には関係無い話だけどな…

理由は簡単、俺には魔法の才能が全く無いからだ…

魔力はかなり有るらしいが、才能の方はからつきし駄目らしい…その証拠に火を灯す初級の魔法では、一時間経つても火すら出る気配が無かつた…

…俺にはこの力が有れば充分か…

祐奈が強くなつたとしても俺が守る…それだけは変わらねえ、いや、それだけで充分だ。

「何笑つてんだよ？ 気色悪いな！」

「んだと？ 嘘噏売つてんのか恋次？」

「本当のことだらうが」

「よし、歯あ食いしばれ…」

今にも殴り合いそうな雰囲気で睨みあう俺達に「いい加減にしないか、この馬鹿共…まあ、どうしても氷漬けになりたいと言つなら止めはしないが？」

「「け、喧嘩なんかしてないから氷漬けだけは勘弁して下さ～～～！」

「分かれば良いんだ、分かればな？」

黒い笑みを浮かべるエヴァを見て、俺達二人はガタガタと震える。

俺達一人が氷漬けにされた回数は数え切れない……あれだけは……
ヤバい……震えが止まらねえ……

そして、そんなやり取りをしていると、いつの間にか学校についた
のでさつさとクラスに俺達は向かつた……

(円 side)

今日は珍しく高畠先生が出張じゃなくて、久しづつにHRをしてる
んだけど……

後ろを向いてあの人の方を向くと……
やつぱり……寝てる……

一護はいつもHRは寝てるんだよね……

あ……明日菜が一護の所に歩いていつて……
そして、「起きなさいっ……」

うわ～～～痛そ～～頭に思いつきり拳骨落とされてるよ……
「つっ～～～なにしゃがるつこの野郎つ……」

殴られた一護が明日菜に向かって怒鳴る。

つて言うか明日菜は女の子だから、野郎じゃないでしょ……

「あんたが高畠先生の話を聞いてないからでしょ……」

「眠いんだから仕方ねえだろうが……」

「そんなんの知らないわよ……」

「あ～成程な……タカミチが話してるのを聞いてないとそんなに怒
るのか」流石オジコンは違うな?」

「あんたちょっとつ……それ以上言つたら……」

一護に言われて顔を赤くしながら慌てる明日菜を見ながら

「それじゃあ、一護が言つた事を認めてると同じだよ明日菜……と
心の中で溜息をつく。

でも、好きな人がいるだけマシかな?……私は
ふつと、私の頭の中にあの時助けてくれた人の顔が浮かび上がる。
その人も確か……黒崎一護つて名前だったような……

でも、あそこにいる一護とはまったく違うんだよね……髪の色も違つ

し……円の色も違う……

もしかして……兄弟とか？それとも従兄弟？

うん……聞いてみたほうが早いかな？

そんな事を私が考えていたら

「はい、じゃあHRは終わりにするからね？一護君と神楽坂君は喧嘩をしないようにしてね？」

「は、はいっ！」

「くっく

高畠先生が一人に注意してHRが終わっていた。

聞くなら……今しかないっ！！

「あ、あのさ……」

(一護 side)

面倒なHRが終わって俺はもう一度寝ようとする。

……畜生あのオジコンが……俺の睡眠を邪魔しあがつて……
だが、寝ようとした俺に

「あ、あのさ……」

と、誰から声を掛けられる。

声の方を向くと円がいた。

「ん？ どうした円？」

「え？ つと……変なこと聞いて悪いんだけど……一護つてお兄ちゃんとか従兄弟とかいるの？」

「……何でだ？」

多分、理由は分かる……

円はあの時の俺の事を兄貴か従兄弟だと思つてんだろ……

「何となくかな~」

と、俺の方を向いて円が笑う。

……俺の事を教えたなら嫌でもこいつの世界に引きずり込まれる……

教える訳にはいかねえ……巻き込まれるのは俺達だけで十分だ……
だから……嘘をつく……

「あ～いるいる、何か随分前にこっちに従兄弟が遊びにきてさ……人助けをした～とか言ってたぜ？しかも俺の名前使つたとか言ってさ～」

「へ～……そなんだ～ありがとう、一護」「うう～」「禮を言わることは何もしてねえ……それどころか嘘までついたんだ……

……この事が心のどつかに引っかかるって今日一日は気分が悪かった……

(深夜)

侵入者が女子寮近くにいる。

その情報を聞いた俺は真っ先に女子寮に向かった。

狙いは俺と同じクラスの近衛木乃香、近衛は関西呪術協会の長の一人娘でその体の中に膨大な魔力があるせいでの関西の過激派の奴らに狙われているらしい……

祐奈と恋次は別のところで戦っていて、手の空いた俺がそこに向かうことになつた……

「つたく……またお前らかよ……」「

「そう固いこと言つくなや、一護！また戦りあおうやないか～！」「

「うつせえ、お断りだこの野郎～！」

そこには合計一十体程の鬼達、しかも大半が顔見知りだ。「顔見知りだからつてここには通さないぜ？」「

「んな事は解つてるわい」

「そんじゃあ……始めるとするか～！」

指輪から斬月を出しながら妖怪化し、近くにいた鬼を切り裂き

「月牙天衝つ！！」

そして、そのまま月牙天衝を前にいる鬼達に放つ。

「ちよつ！？いきなり半分も減らすなんて反則……」

「勝負に反則も糞もあるかつ！！！」

攻撃を鏡花水月で躱しながら次々に鬼を切り裂きながら怒鳴る俺の耳に

「一護……？」

ここにいてはいけない奴の声が届く……

「なつ……な、なんでお前が……？」

そこにはいるのは円だつた……

十話（後書き）

祐奈の始動キ - が思いつかない（泣）
誰か良い始動キ - を考えていただけると嬉しいです。

感想お待ちしています！！

十一話（前書き）

更新が遅くなってしまい申し訳ありません…
碧の軌跡をやるのに夢中になつていてすっかり忘れていました…

reina様、感想及び始動キ-の案をくださりありがとうございました！！

Pv50000突破、ユニ-ク10000人突破致しましたっ！！
ありがとうございます！！

(円 side)

「なつ……な、なんでお前が……？」

そう言つてこつちを驚いた顔で私の方を見てくる。

その人は月の光を浴び、手には出刃包丁みたいな大きな剣を持っている。

その人の顔はあの時私の頭から一回も離れた事は無かつた。

「えつと……」

「何でここにいんのかつて聞いてんだよ……！」

急に怒鳴られて、私の体がビクンッと跳ね上がる。

「ここは危ねえから……下がつてろ」

そう一護が言つたと同時に体の周りから黒い炎みたいなものが立ち上つてくる。

「おー、テメハら……悪いが本氣で潰しにかかるぜ……」

その言葉と共に一護の姿が私の前から消えた…

「消えた！？」

「気つけや……明鏡止水や……」

周りにいる鬼（？）達が警戒して周りを見回している。

「どこ見てんだ？」

その声と共に一匹の鬼が切り裂かれる。

「えつ……？」

「一体……何が……どうなつてるの！？」

私は自分の目の前で起こつてゐる事に夢中になつていて、後ろにいる何かに気づく事が出来なかつた。

「悪いのう、お嬢ちゃん……」

「だ、誰……」

後ろを見た私の手には、鳥のよつた妖怪が立つてゐた…

「助け……」

一護に向かつて叫ぼうとした私のお腹に鈍い衝撃が走つて、私は意識を手放した。

(一護 side)

…おかしい…こいつらの戦いかた…

まるで、時間を稼いでる感じだな…

「おい、何のつもりだ？ そんなんで俺を倒せると思つてんのかよ？」
「まさか、そんな訳ないやろー？ ワシらは時間を稼げば勝ちやからな」

やつぱりか…

そこで俺は気付いた… 数が一匹足りないことに…

しまつたつ！…こつちは陽動かよ！…

慌てて後ろを向いた俺を新たな驚きが襲つた…

それは…

「はあ！？ 円がいねえ！？」

落ち着け…落ち着け、俺…！

こいつらが円を連れて行つた理由がまず分からねえ…

「おい、一護」後ろのお嬢ちゃんはどうして行つたんや？
「は？ お前らが連れて行つたんだろ？」

「何言つとんのや？」

「…」「…

おいおい…まさか…

「勘違い…やな…」

「何、他人事みてえに言つてんだつ！…」

「今思えば、あいつ色々抜けとるからのう… 黒髪の女の子としか言わねんかったから… 間違つたんやな」

「良いのか！？ それで！？」

俺のツツコミがその場に虚しく響き渡る。

「ツツコミ入れてる場合じゃないでしょ？」一護…！

そこに聞こ覚えのある声が響き

「ラード？ ドラード？ カドア？ カランドリア、 来たれ雷精、 風の精！！」

雷を纏いて吹きすさべ、 南洋の嵐！！ 雷の暴風つ……」

鬼達を雷を纏つた旋風が飲み込んでいった。

「ナイスタイミングつ…… 祐奈……」

「ここは私と恋次に任せて早く円を助けに行くな……」

「ああ…… ありがとう……」

その場を祐奈達に任せて、 僕は鬼を召喚した術者を探しに行つた。

(祐奈 side)

「しつかし…… 多いな…… こつやあ……」

「あれ？ 恋次君はビビッちやつたのかにやー？」

「んな訳あるか！ ただ……」

言葉を切り、 恋次は笑みを浮かべて続ける。

「倒し甲斐があるじやねえかよつ……！」

そう叫んで恋次は鬼達の所へ飛び込んでいく。

うーん…… 恋次のあの戦い好きはなんとかならないのかな？

そんなんだから「赤き鬪神」なんて呼ばれるんだよ……

「あははは…… しょーがない…… 私も大切なクラスメイトを守る為に頑張つひや おつかにやー？」

(侵入者 side)

くそつ…… まさかここまで鬼共が使い物にならないとは予想外だ……

しかも、 よりによつて無関係の者を連れてくるとは……！

「仕方があるまい…… 始末を……」

「コツつ コツつ……」

その時、 私の耳に聞き慣れない足音が届いた。

追つ手か…… まあ、 良い…… 予想範囲内だ……

そして、 足音が聞こえた方を向いた……

……なんだと……？

誰も……いない？

だが、足音はこっちに向かつて真つ直ぐ向かつて来る。
喉が勝手に干上がつてくるのがわかる……

「な、何者だつ！？」

「それはこっちの台詞だ、この野郎」

何も無い虚空から、若い男の声が聞こえてくる。

「つてかよ……今聞き捨てならねえ事言つたよなテメエ？……始末するだつたか？」

その言葉と共にどこからか発されている圧力が更に強くなる。

「そ、それがどうした！？」

そして、声の主が姿を現わした。

その姿は、人間のようで、異形のようでもあった。

「貴様が……噂に聞く静寂の暗殺者か……」

音も無く虚空から現れて、式神を切り裂く姿は静寂の暗殺者と呼ばれ、恐れられていると聞いたが……まさかこんな子供とはな……まあ、良い……ここで消してしまえばいい話だ。

「疾つ……！」

私が放つた符から出た炎が目の前にいた男を飲み込んで行く。
無論、後には塵一つ残っていない。

「はははははつ……こゝ「随分ど」満悦そうじやねえか？」な、な
につ！？」

炎に飲まれて死んだ筈の男がいつの間にか私の後ろを取つている。

「なぜだつ！？何故生きている！？」

「何故つて……決まつてんだろ？あそこで俺はいなかつたつて事さ
さも、当然のようにならうを向いて言つてくる。

「なにを……言つていいの……？」

「まあ、お前には一生かかってもわからねえだらうがな……」
その声と共に刀の峰で顔面を強打された。

……ナゼダ？

ナゼ、コノ私がコノヨウナトコロで……？
「てめえの敗因はただ一つ……俺の大切な奴クラスマイトに殺意を向けたことだ……」
よく覚えとけクソ野郎……」

そして、私は意識を手放した。

（一護 side）

終わつた……か。

さつさ見た感じだと、円はそんなに酷い怪我はしてねえみたいだな……

「ん……」

「おつ？ 気が付いたか？」

「あ、あれ！？ あの鳥は！？」

「鳥？……大丈夫だろ……たぶん」

そして、その場に沈黙が流れる。

……氣まずい……どう説明しようか……

「助けてくれてありがとう、あなたつて一護の従兄弟なんでしょう？」

「違う……俺は……」

そう言つて俺は妖怪化を円の前で解いた。

「……え……つ！？」

円の瞳が驚きで見開かれる。

「俺は……お前に嘘をついた……今ここにいる俺は従兄弟なんかじゃねえ……正真正銘の……黒崎一護だ」

十一話（後書き）

感想お待ちしています！！

十一話（前書き）

雪門様、reina様、感想有難う御座いました！！
p v 6 0 0 0 0 突破致しましたっ！！

俺は今、円を連れてエヴァの家に向かっている。
まあ、無理もないか…

どこか、呆然としている円を見ながら俺は思った。
正体をばらした後に魔法の事や俺の事を簡単に説明した。
なにせ、意味も分からずに巻き込まれて、その次は魔法があるつて
話と、俺が円が知ってる黒崎一護だつて言われたら誰でもある
よな…

そんな事を考えていたら、いつの間にかエヴァの家の前に着いていた。

「エリは？」

「言つてなかつたか？ここエヴァん家たぞ？」

「えつ！？エヴァちゃん、こんな所に住んでたんだ…道理で寮で見
ない訳だ…」

「あいつは基本自由だからな…」

と、俺が苦笑しながら扉に手を掛けようとする前に

「GOOD EVENING、一護！…」

と叫びながら俺に親父が飛びかかってくる。

「やかましいつ…！」

煩わしいから親父の顔面を渾身の力を込めて蹴り飛ばす。

「ゴパアツ！？」

変な声をあげて親父が吹っ飛んでいくが、シカトしてエヴァの家の
中に入る。

「大丈夫…なの？」

「あれぐらいじやくたばらねえよ、なにせGみてえなじぶとさだか
らな。」

「G扱いつて…はあ…」

別に円が溜め息をつく必要ねえと思つんだが…？

「全く… もう少し静かに入つてこれんのか…？」

「うつせ、ゼルダやりながら言われても説得力ねえよ…。」

「ふつ、これの良さが分からないと、まだお前も子供だなー護?」

「そういう事を言つてんじやねえっ…。」

しかし、600歳で見た田子供の女の子がゼルダに夢中つて…シコル過ぎる…。

「むつ? うう言えば、何故ここに釘留がいるんだ?」

「祐奈と恋次に聞いてねえのか?」

あの一人が言い忘れる訳ねえんだけどな…

「祐奈さんと、恋次さんは確かにマスターに言つていました… ただ

「ただ?」

茶々丸に聞き返すと

「ゼルダに夢中で恐らしく聞いていませんでしたが…」

「…トかよ…。」

「…トでは無い…。ちやんと働いているだるうが…。」

自覚がねえか… 可哀想に…

「と、とにかく別荘に行くぞ…。あいつらも待つてこるだらうからな…!」

「逃げたな」

「逃げたね」

「ご心配無くマスター… 逃げたとしても私はマスターの味方ですの

で」

俺達の放つた言葉でエヴァの顔が赤くなつて…

「逃げていなーいつ…。」

「どうう」

ムキ・ッといつちに向かつてくるエヴァを軽くあしらひ。

「ああ… マスターが喜んでいます…。」

「どこをどう見たら、そつなるんだこのボケ口ボがあつつ…。巻いてやる、巻いてやるぞおおつ…。」

「ああ、こけませんマスターつ…。そんなに巻かれては…。」

「…」

エヴァと茶々丸は放つておいてよむれつなので先に円を別荘の中に案内することにした。

「うわーっ！－何、！」－？」

別荘の中の光景を見て、円は素直に驚いている。

「まあ、驚くのも無理はねえよ、俺も最初は驚いたからな」
そんなことを話していると、遅れてエヴァと茶々丸、そして親父が入ってくる。

それに気付いた恋次達がこっちに来て、一応全員集合した。

「それでは…まずは釣宮」

「は、はい！」

緊張しているのか、少しどもつていたが大丈夫か？

「率直に聞こい…覚悟はしているんだろうな？」

「うん、魔法の事を知ったからこそ、一護を助けたいって思つた…
だから覚悟ならあるよ…！」

「良いだろう、お前もミシチリ鍛えてやるからそのつもりでいろよ
？」

…氣のせいいか？エヴァの笑みが滅茶苦茶怖かつたんだが！？

「よし…次は俺から話がある。」

「親父が？」

親父の真剣な顔をみながら聞く。

だが、俺は知つている…こいつが真剣な顔をする時はどうしようも
ない程のオチが着くという事を…本当に嫌という程に知つていた…

「仮契約しろ、一も「取りあえず死ね」ゴパアッ！？」

仮契約つてのが何かは知らんが…口クでも無さそりだから取りあえ
ず殴つておく。

「仕方ない…私が説明してやるつ…仮契約といつものば、それをす
る事によつて強力な魔法具が手に入るといつ儀式だ。」

「へーだつたらじようよー護！？」

「うん、そういうのがあれば足手まといにならなくて良いかも…」
祐奈と、円が乗り気になつてやがる…

だが…

「どうやるんだ？それ？」

「決まっている、キスをするんだ。」

は？

「「えつ！？／／／」」

おい…今こいつさらつと、とんでもない事言いやがらなかつたか…？

「そ、そんなり…まだ心の準備が／／／

「き、キスつて…／／／」

いや…そんなに嫌がられると、何か凹むな…

「嫌なら別に…」「嫌じやないつ…」「…なら良こんだけどな

つたく…嫌なのか、良いのかはつきりしきつつの…

そんな事を考えていると

「準備出来たぞ～一護～」

いつの間にか親父が何やら魔法陣りしきものを描き終わつてこる。

「何してんだテメエつ…！」

「なんだ一護～？照れてるのか～？」

「て、照れてねえつ…！」

いや…でも一人共可愛いし…つて！？何考えてんだ俺つ…？

「ヒュ～ヒュ～熱いね～ここだけすげえ熱いんですけど～

「一遍死んでみるか？恋次…！」

こいつはそういう噂聞かないんだよな…何でだ？

「一護…もうとつぐに一人共準備ができているんだ…一護をどう

ないか…！」

エヴァに怒鳴られしぶしぶ陣の中に入る。

「えつと…私が最初だから…よろしくね？／／／

「あ、おつ…／／／

最初は祐奈とみたいだな…

あ～つ…！恥ずかしいつ…一護をと済ませるか…？

そして、俺と祐奈の唇がゆっくりと近づき…重なる。

その後、そこにカードのような物が出てくる。

今の俺にはそれを見る余裕すらなく、とつて後ろをむく…
だが…再び俺の脣が誰かに塞がれる…

「…?」

「む、向き合つてだと…恥ずかしいから…／／／
それをしてるのは言つまでもなく円だった。

(第三者 s . i d e)

仮契約を済ませた一護達は、恥ずかしかつたのか今だ顔が少し赤い。

「よし、カードは持つたな? 一人共」

「「うん! ! !」

エヴァからの呼びかけに元気に答える円と祐奈。

「それでは、アティアクト(来たれ)と言つてみり

「「アティアクト! ! !」

その声と共に、円の手にはハープが祐奈の手には二丁の銃が現れる。
「へへすげえな~」

それを見た一護が感嘆の声を上げる。それに反してエヴァと茶々丸
は啞然としてそれを見ている。

「「……」「

「な、なにか変かな?」

と、祐奈が一人に尋ねる。

「いや…祐奈のアティアクトは至つて普通なんだが…釘宮のア
ティアクトがちょっととな」

とエヴァが円に視線を投げかける。

円の方は困惑した表情で「え? 私のがどうしたの?」とエヴァに聞く。

「なんだ? そんなに珍しい物なのかよ?」

「ああ… それはオルフェウスの豊饒と言つてな…アティアクト
の中でも珍しいマスター・ピース級の物
だ。」

「まつ…マスター・ピースか…中々アだな」
エヴァの説明に興味深そうな反応をする一心。

「どういう風に使えばいいの？」

「とりあえず弾けばわかるわ」

「え！？私、豎琴なんか弾いた事ないよ！？」

「問題ない…お前の頭の中にどう弾けば良いか浮かんでくるはずだ」
そう言われ、豎琴に円は手を添えて弾き始める。

「

豎琴など、一度も弾いたことのなかつたはずの円から心が洗われる
ような音色が紡ぎ出される。

そして、

「…「…「…「…「…」」」

演奏が終わると同時にそこそこ全員から自然に拍手が送られる。
「ほんとに頭の中にビリビリ弾けば良いか浮かんできたよ…！」す

「…」

「まあ、それの本質はそこじゃないんだ…その本当に凄いところ
は…回復、解呪、身体強化の能力を音色によって出せるところだ。

」

「…なるほどな…そういう事か…しかし、あの馬鹿がかけた呪いだ
ぞ？大丈夫なのか？」

「ふつ…甘く見るなよ、一心…これはどんな呪いも解呪できる性能
からマスター・ピースになっているんだ」

エヴァと一心の話についていけていない一護達四人は取り残された
ような表情を浮かべている。

「えつと…私たちにも分かるように言つてくれる？エヴァちゃん
「なに、簡単な事だ…釘宮、私に掛かっている呪いを解くんだ」

十一話（後書き）

恐らく、次回は正義の魔法使い達と一緒に護達がもめます。

感想お待ちしてます！！

十二話（前書き）

テスト勉強が忙しく、中々更新できずすいませんでした！！
まだテスト終わってないんですけどね（笑）

reina様、支配者様、感想ありがとうございました！！

PV70000突破致しました！！

ありがとうございます！！

「呪いを解くつて……んな事出来んのかよ?。」

「う~ん……出来るか分からぬけどやつてみるよ。」

そう言つて円が、豎琴の弦に手を添えて、音を奏で始めた。その場に再び、さつきとは違つた音色が響き渡る。

「……ん?……おわああつ!？」

その時、恋次が何かに気付いたような声を上げ、その後、驚いたよう叫んだ。

「どうした! ? 恋次……つて、うおつ! ?」

恋次の方を向いた俺の目に飛び込んできたのは……

「む・・・? どうしたお前ら?」

エヴァの体の周りにまとわりついている、いかにも呪いの精ですって感じのものだった。

「「それは、こっちの台詞だつ! ! まず、お前がどうしたつ! ?」」

あまりの驚きに俺と恋次のツツこみが見事にハモつた。

が、「うるさい! 集中できないから静かにするつ!」

と、円に一喝され、俺達は即座に黙る。

「いやははつ~一護、怒られてる~」

「うつせ! 放つとけ! !」

裕奈にからかわれ、俺は裕奈を睨んだ。

そして、5分後……

「ついに……ついに、呪いが解けたつ! ! そだ、この感じだ! !

! 失われていた力が戻つて……ん?」

喜んでいたはずのエヴァの顔がキヨトンとした顔になる。

「ん? どうしたんだ? エヴァ?」

「半分しか……戻つてない……だと?」

は?呪いは解いたのに、何で力が半分しか戻つてねえんだ?

「エヴァの口頃の行いが悪いからじゃねえの?」「んな訳あるか?!!」

「分かつてゐつて、冗談、冗談」

だとすると・・・

「あの爺さんが何かしたんじゃねえのか?」

「ふむ・・・確かに、あのジジイならやりかねんな・・・
そうだよな・・・俺もあの爺さんは、何かあまり好きじゃねえん
だよな。」

「よし・・・あのクソジジイをちよつと締め上げてくれるか・・・」

「そう言つて黒いオーラを纏いながら笑みを漏らしていた。」

「『怖つ!怖つ!』」

その場にいた全員がそれをみて恐怖を抱いていた。

（あ・・・爺さん、死んだんじゃね?）

俺の頭の中に爺さんがエヴァに締め上げられて死にそうな状況がありありと浮かんでくる。

「おー、一護これがかりどつするんだ?」

「どうするつて何をだよ親父?」

「何つて・・・エヴァの呪いを解いて正義の魔法使い（バカ）共に
なんて言つ氣だ?」

あ・・・そうだ、すっかり忘れてたな。

「ま、なんとかするわ」

（その日の夜）

予想通り呪いを解いた事がバレて俺とエヴァと恋次は学園長に呼び
だされた。

「さて・・・説明してもらえるかの?」

エヴァに締め上げられたようで、包帯を頭に巻いている学園長が俺

達に尋ねてくる。

「君達は、一体どうじつもりなんだ！？あのエヴァンジロリンの呪いを解いてしまうとは…！」

正義の魔法使いの一人、 Gandalf が、険しい声色で俺達を問いただしてくる。

「どういうつもりって言われてもな・・・ってか、大体あの呪いつて3年たつたら解く約束なんだろ？」

「それは・・・」

口後盛る Gandalf に更に追い討ちを掛けるように言いつて、実際は3年以上ここに縛り付けて・・・正義の魔法使いが嘘言つて良いのかよ？」

「奴は、悪の魔法使いだ！！縛り付けるのは当然だ…！」

「あ・・・出たよ、正義の奴等の戯言が・・・

「哀れだな・・・その正義が間違つてんのも知らねえでさ

「間違いですつて！？一体、何処が間違いだと言つんです…？」

Gandalf に変わって、高音が俺に喰つて掛かつて来る。

「大体、貴方もお父様と同じように偉大なる魔法使いマギスティル・マギ）を目指しているのではないですか！？」

「は？ いつ俺がそんな事言つたんだよ？ ってか、第一、親父はマギステル・・・なんだつけ？ まあ良いか、それにはなつてないし

「「なつ！？」

お？この反応を見ると、どうやら知らないみてえだな・・・

「な、なぜ？」

「本人曰く、「面倒臭えんだよな、そういうのは・・・ってか、俺はあんなのになる為に戦つた訳じやねえしな。」って、言つてたぜ

？」

俺が、そう言つと周りの正義の魔法使い達が動搖し始める。

「ふん、なんだ？ 貴様らが想像していた、一心と実際の一心と違つてショックだったのか？」

動搖している正義の魔法使い達を見てエヴァが小馬鹿にしたような

笑みを浮かべる。

「黙れっ！！貴様のよつなか「おい・・・」なんだ？？？ヒッ！」

？」

一人の名前も知らない正義の魔法使いがエヴァに言おうとした事が分かり、自然と殺氣をそいつに向けた。

「別に、俺や親父を馬鹿にすんのは構わねえ・・・だがな、こいつは・・・エヴァは、俺の家族みてえなもんなんだよ・・・家族を馬鹿にするつてなら・・・それなりに覚悟決めろよ？つて、聞いてねえか」

殺氣を当てすぎて、泡を吹いて氣絶している奴を見ながら呟く。

「フォツ、フォツ・・・ちと、やりすぎかのう？この年寄りには、強い殺氣じやつたの！」

「悪い、忘れてた」

「忘れてたつて・・・まあ、一護君らしきけどね

と、タカミチに苦笑いされる。

「つてか、俺らしこって何だよ？」

「まあ、エヴァも卒業するまでは大人しくしておるらしきし、この件はこれで終わりじや」

「で、ですが・・・」

「異論は認めん、解散じや！」

学園長の鶴の一聲によつて、渋つていった奴等も帰つて行く。

「は～、疲れたぜ・・・俺達も、とつとと帰ろうぜ～」

「ああ、そうだな」

俺の言葉に、今まで口を開いていなかつた恋次が答える。

「つてか、何でお前今まで喋んなかつたんだよ！？」

「いや～一心さんに、この件は一護一人にやらせろつて言われてなあの馬鹿親父・・・」つちは大変だつての！～

「おい・・・一護・・・」

「ん？どうした？エヴァ？」

学園長室から出よつとした俺をエヴァが呼び止める。

「その・・・あれだ・・・家族と言つてくれてありがとう・・・」

／＼

「いって、気にすんなよ」

「ふ、ふん！言われ無くても気にしないわ！…」

そして、何故か顔の少し赤いエヴァと一緒にエヴァの家に帰った。

十三話（後書き）

感想お待ちしています！！

十四話（前書き）

雪門様、感想ありがとうございましたーー！
漸く、ネギの登場です。

そして、Hグアの件からしばらくした後、再び俺達は学園長に呼び出されていた。

「で？ 何か用かよ？ 爺さん？」

「ふむ、実は今「断る」まだ何も言つていらないんじやがの？…？」

どうせ、ろくでもねえ事だろ？

「なんか、ワシへの扱いが酷い気がするんじやが…」

そう思わんか？ タカミチ君…」

「アハハハ…」

急に爺さんに話を振られ、タカミチが苦笑する。

「まあ、さつきのは冗談だから…で？」

「実はの？、今日からネギ・スプリングフライルドと言つ新しい教師が来るんじやがの？… その子の世話を頼みたいんじやよ」

は？生徒が教師の世話…だと？

「爺さん… ちなみに聞くけどよ… そいつ、何歳だ？」

「10歳じやが？」

爺さんから、発せられた言葉に俺達の思考が一瞬フリーズする。

そして…

「「はあ…？」

「いや…？ 常識的に考えて駄目だろ…？ 10歳だぞ…？ まだ小学生じゃねえか…！」

「わしらの？… 正直に惑つておるんじやよ… 卒業試験とはいえちよつと無理があるしの？」

なんか、また面倒臭そうだな…

「まあ、理由はどつあれ… お断りだ… そりゃ辺の正義の奴らに任せ るんだな」

そう言つてドアに手をかけた瞬間…

「ちよっと、どうこいつ事ですか、学園長先生…？ こんな子供が先生

つて！？」

という聞き覚えのある声と共に、ドアが凄まじい勢いで開き、そのままの勢いで俺の顔にぶつかる。

「痛えつ！？」

顔を押さえてしゃがみこんでいる俺の隣で恋次が必死に笑いを堪えている。

「あ…黒崎いたんだ」

「いたんだ…とは随分失礼な事言いやがるな？」

こいつは神楽坂明日奈、俺のクラスメイトで中学生なのにタカミチが好きという所謂オジコンってやつだ

「一護くんや～おはよ～」

「おう、おはよ～」

こっちの奴は近衛木乃香、爺さんの孫らしい…らしこって言ったのはどう見ても似てねえからだ…特に頭の辺りが…

そして、その後ろにいる子供が恐ろしく話に出てきた、ネギ？スプリングファイールドだろうな…見覚え無い顔だし…だが、そんな事より気になるのは…

「神楽坂…何でジャージなんだ？」

「何か分かんないけど、そいつがくしゃみしたら制服が吹っ飛んだのよ！～」

「おいおい…何、普通に魔法使つてんだこいつは…秘匿という言葉を知らねえのか！？」

「！」苦労じゃったのう、木乃香に明日奈ちゃん、教室に戻つて構わんぞ

そつちの一人も良いぞ、と爺さんが思い出したかのように付け加えた。

ドアを開けるといつものバーの光景が広がっていた。

例として挙げるなら、今日もせつせとトラップ作りに励む双子ヒスター や、ジャグリングを披露しているピエロとかだ。

…毎回思うがこのクラスは変なの集まりすぎだろ！？

「あ、おはよ～黒崎～今日は明日奈と木乃香と来たんだ～？」

「何か、凄え誤解を招くような言い方しやがるな…記事とかにすんなよ、朝倉…」

わかつてゐつて～とこう返事を聞いてもまだ不安だ…

それに…

裕奈と円にもの凄いジト目で見られてる気がするが…俺のせいか！？

「そういえば…新しい先生が来るつて本当？」

「どつから、そんな情報仕入れてくんだつ…まあ本当だけどな

「へえ～どんな先生？」

「どんなか…10歳とか、魔法使いだと…言えねえ…

「ちょっと変わった人だぜ」

こう言うしかねえよな…

そして、俺がそう答えると同時にチャイムが鳴り、雪広が座るようにな指示を出す。

そして、全員座り終えたといふを見計らつたよひにしてドアが開いた。

まあ、当然黒板消しがそいつの頭に落ちて来る訳だが…

俺の予想通り、ドアを開けたのはネギ・スプリングフィールドだつた。

そして、黒板消しがネギの頭に直撃…せずに数センチ手前で何かに阻まれるよひにして浮いている。

ん？

あいつ…まさか魔法障壁を解いてねえんじゃ…？

ネギの方もそれに気付き、慌てて魔法障壁を解き、黒板消しが頭にヒットした。

それから先は酷いもので、全てのトラップに引っ掛けり、最後は、

どういう原理で落ちて来たのか、金ダライがヒットし、皿を回していく。

……1年前のトラップにタライつてあったか？

あいつら…トラップを強化しやがったな…

笑っていた周りの奴等も子供だと分かると、心配をし始める。

そして、復活したネギが気を取り直して教壇に立つ。

「これから皆さんにまほ…英語を教えるネギ？・スプリングフィールドです、これから直しくお願ひします。」

……今、あいつ絶対魔法つて言おうとしたよな！？

本当にこいつ大丈夫かよ…

まあ、その後もやらかしてくれたぜ…

例えば、富崎が本を持ち過ぎて階段を踏み外したのを俺が見かけて、縮地で間一髪で助けた日の前でネギが杖を構えて、いかにも、今から僕、魔法を使いますみたまに霧囲気をかもし出していた。

まあ、俺に見られただけなら良かつたんだが…神楽坂にも運悪く見られていて、1日で魔法使いとバレるという、まさかの事態を引き起こした。

ん？俺はだつて？

勿論、神楽坂に「あんたも、魔法使いでしょー！」

と言われたが、「あれば、縮地つづう技だよ、魔法なんていうオカルトじやねえ」

という言い訳で回避した。

エヴァにもしもの時に教えて貰った言い訳が役にたつたぜ…。

後、また神楽坂が服を（下着も）吹つ飛ばされたのは、完璧な余談だ。

俺は悪寒がしたから見なかつたけどな…

その後も、タカミチ相手に読心術使つたり、惚れ薬を作つたりなど色々してかしやがつた。

惚れ薬は裕奈と円が大事になる前に処理したらしい。

大変だなあいつらも…

俺のネギに対する印象はトラブルメーカーだ。

そして、このクラスにとっての最悪の日、テストが近付いてきた。その日が近付いて来るに連れて、クラス内にある噂が広まつていった。

それは……今回のテストで最下位だったクラスは小学生からやり直しつていうもんだった。

十四話（後書き）

感想お待ちしています！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0699w/>

魔法先生ネギま！畏を継ぎし死神

2011年11月24日18時56分発行